

# 政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2024年（令和6年）2月29日

一般財団法人 櫻田 會  
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 慶應義塾大学法学部専任講師  
長野 晃

第41回（令和4年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

ドイツ政治思想史における「身分国家」の理論と実践

Theory and Practice of the “Ständestaat” in the History of German Political Thought

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This study aims to comprehensively examine the conceptions of *Ständestaat* in 20th-century German political thought from both theoretical and practical perspectives. Regarding the Weimar period, I intensively analyzed primary texts by Heinrich Herrfahrdt and Edgar Tatarin-Tarnheyden. Herrfahrdt, in his book *Das Problem der berufständischen Vertretung* (1921), expected *Berufstände* to play a pivotal role in effectively representing the interests of the nation and integrating powerful economic associations into the state. However, he constrained the function of the Economic Council composed of *Berufstände* exclusively to the act of deliberation. In the same period, Tatarin-Tarnheyden, in his *Die Berufsstände* (1922), attempted a more refined theorization of the concept of *Stand* and proposed the formation of the upper house based on *Stände*. While both theorists shared a strong criticism of parliamentary democracy conducted through political parties, there were subtle differences between their positions regarding the role *Stände* should play in practical politics. Additionally, concerning the National Socialist regime, I examined various works by Ernst Rudolf Huber. Huber praised the National Socialist regime as a constitution based on the principles of leadership and obedience. Remarkably, he depicted the National Socialist “constitution” as a unique political order in which conventional concepts such as democracy, dictatorship, and single-party state no longer find applicability. While Huber’s

arguments are overtly anti-democratic, they are insightful in addressing the fundamental question of what democracy entails, providing implications for contemplating contemporary populism and democracy.

#### ※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

本研究は 20 世紀前半のドイツにおける身分国家構想を理論と実践の両側面から包括的に検討することを目的とする。身分を政治制度に直接反映させる構想は、生来の身分としての貴族が力を失った時代にあっては、もっぱら「職業身分(Berufsstände)」に基づく身分国家論として展開され、ドイツの政治思想において無視し得ない影響力を有してきた。この構想はヴァイマル憲法に規定されたライヒ経済評議会が失敗に終わった後も形を変えて生き延び、ヴァイマル末期には機能不全に陥った議会を改革する方策として保守派の側から主張された。その後を襲った国民社会主義勢力も、当初は独自の身分制構想を有していた。以上の政治状況に伴い、政治学者や法学者たちも様々な身分制構想を戦わせ、同時代のイタリア・ファシズムのコーポラティズムやオーストリアのカトリック的権威国家とも対抗する形で、ドイツ独自の身分国家の可能性を論ずる思想的状況が存在した。本研究では、身分国家論を展開した政治学者・法学者・社会学者・哲学者たちのテキストを網羅的に検討することを通じて、国民、代表、選挙といった政治学の基本概念の問い直しと関連しつつ展開されていった、上記の思想的状況を解明したい。

#### ※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

20 世紀ドイツ政治思想における「身分国家」構想を検討するため、本助成期間を通じて同内容に関わる一次文献及び二次文献を精査した結果、以下の見通しを得た。

ヴァイマル期に関しては、主として職業身分制を積極的に擁護した二人の国法学者、ハインリヒ・ヘルファールト(Heinrich Herrfahrdt)及びエドガー・タターリン＝タルンハイデン(Edgar Tatarin-Tarnheyden)の一次テキストを集中的に分析した。当初から議会制に代わる新たな体制を志向したヘルファールトは『フランス革命から今日に至る職業身分代表の問題』(1921)において、国民の利益を実質的に代表し、強力な職業団体を国家に組み込むという役割を職業身分制に求める一方で、様々な不都合を防ぐため、職業身分原理に基づく合議体には純粋な審議機能のみを認め、ライヒ経済評議会を通常の議会と並び立つ決定機関へと改革する試みを否定した。この議論は後に、仲裁官たる役割を果たして強力な政治的指導を為し得るライヒ大統領を要請する立場と結び付いていった。また同時期にタターリン＝タルンハイデンは『職業身分制——国法におけるその地位とドイツの経済憲法』(1922)において、身分概念のより精緻な理論化を試みつつ、普通平等選挙に基づく民主主義を乗り越える立場を提示した。そこでは、議会制の廃止は目下の所現実的ではないという前提に立ちつつ、二院制の上院を職業身分に基づいて構成する構想が示された。以上のように両者の職業身分制論は、政党を主体として営まれる議会

制民主主義に対して強く批判的であるという点で共通点を有しながら、職業身分が現実政治において如何なる役割を果たすべきかという点につき、微妙な立場の相違を示すものであった。

国民社会主義政権期に関しては、所謂キール学派の一員として体制を擁護した国法学者の一人であるエルンスト・ルドルフ・フーバー (Ernst Rudolf Huber) の諸作品を検討した。最終的に『大ドイツ・ライヒ憲法』(1939) に結実する、国民社会主義憲法に関するフーバーの議論においては、ヴァイマル共和国は失敗に終わった国家と看做され、指導と服従の原理に基づく国民社会主義体制が称揚された。そこでは一体的なドイツ民族の歴史的な性格が強調され、「身分」も国制の一要素として位置づけられている。なおその際注目に値するのは、国民社会主義体制が、民主主義や独裁、一党国家といった既存の概念がもはや適用され得ない独自の国制として描き出されていることである。この点でフーバーの議論は、民主主義を否定する立場から、凡そ民主主義とは何かという根本問題に触れるものであり、同時代の民主主義概念を分析する上で重要な素材を提供するものであるのみならず、ポピュリズムと民主主義の境界が揺らぐ現代的状況を考察する上でも有益な示唆を与えるものと評し得る。なおこの内容に関しては、以下に挙げた拙稿「ドイツの経験——エルンスト・ルドルフ・フーバーと「ナチズム」」として、2024年3月に公刊が予定されている。

#### ※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

長野晃「ドイツの経験——エルンスト・ルドルフ・フーバーと「ナチズム」」、細谷雄一・板橋拓己編著『民主主義は甦るのか？——歴史から考えるポピュリズム』（慶應義塾大学出版会、近刊）

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。